

研究ノート

ジェンダーに配慮したカリキュラムの動向について
— 教育現場における展開 —

奥野 佐矢子

Trends in Gender-Sensitive Curriculum in Classrooms

OKUNO Sayako

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 准教授

連絡先：奥野佐矢子 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
s-okuno@mail.kobe-c.ac.jp

Summary

This paper reexamines, through the lens of gender criticism, the daily workings of schools in which egalitarianism in gender is expected. Results show that the “hidden curriculum,” communicated through subtle, everyday actions in the school environment such as in relationships between teachers and students and in teachers’ attitudes themselves, can be observed in school settings. The “hidden curriculum” functions within the “gender” framework. For example, gender roles are frequently invoked in statements intended to attract attention, in body language, in classroom management, and even in gender differentiation in the register of names. The categories of man and woman, which are repeatedly referenced in general, transcend simple differentiation. It was apparent that such gender categories profoundly influence one’s learning opportunities and opportunities related to future life choices, both of which are divided and determined according to the difference in gender. Furthermore, it has become apparent that this practice will produce gendered body in everyday life.

Gender is still an integral part of the hidden curriculum of school culture. Yet, gender functions not simply to differentiate but to discriminate. After elucidating these complex oppressive structures, this study analyzed various initiatives toward “gender-sensitive categories” implemented in actual classrooms. The results of this analysis raise the question of how public education should be reconceptualized from the perspective of gender criticism. The methodology of this gender criticism includes considering the subjects of study in relation to society; cultivating sensitivity to the power relationships within the implementation of education; and prompting a change from the students themselves. The study concludes that countermeasures against such issues should not be simply regarded as plans that are for future consideration, but rather an unfinished project that continues to seek solutions and never stops asking questions.

Keywords: Curriculum, Gender, School culture, Implementation

要 旨

本稿では、性別における「平等」主義を期待されている学校という場の日々の営みを、ジェンダーという批評的な概念を差し込むことにより再検討することを試みた。その結果、学校の現場には教師-生徒関係や教師自身の態度といった微視的な日常実践によって伝達される「隠れたカリキュラム」が、ジェンダーという指標においても機能していることが明らかとなった。注目を集めることで与えられる発言の機会、あるいは身体の動きや教室運営において、さらには男女別名簿をめぐっても、性別カテゴリーは多用される。そのつど繰り返し参照される男/女のカテゴリー区分は、単なる差異を越え、それぞれのジェンダーを印づけられた主体に振り分けられる学習機会や将来の進路決定の機会に深く影響し、やがては物質的にジェンダー化された身体をもつ存在を生産していくことが明らかとなった。

学校文化の「隠れたカリキュラム」において機能するジェンダーは、単なる差異ではなく差別として機能する。その複雑な抑圧構造を明らかにしたうえで、実際の教育現場で実践されている「ジェンダーに配慮したカリキュラム」の、さまざまな取り組みについて分析した。分析の結果改めて問われるのは、ジェンダーという批評性をもった観点から公教育をどう構想しなおすのかという課題である。学習内容を社会関係の中に位置づけること、教育実践の中に内包される権力関係にセンシティブであること、そうした学習者自身の自己変容を促していくような方法論。おそらくこうした課題に応答する実践とは、いつか「確立」されるものではなく、むしろ絶え間ない問い返しとともに模索が継続されていく未完のプロジェクトとなるはずではないかと結論づけた。

キーワード：カリキュラム、ジェンダー、学校文化、実践

1. はじめに

今日の日本における教育的営為を担う中心的な場所のひとつは、公教育＝学校教育である——この見解に対する大きな反論は、おそらく見当たらないのではないだろうか。またそれだけでなく、公教育としての学校教育は「平等」の保障をもっとも期待されている場でもある。その背景として、学校教育における「平等」が、生まれながらの社会的地位や身分などの属性にかかわらず個人の能力と努力を正当に評価する基本ベースとなりうるという近代的なメリトクラシーの議論の支えがある。この考え方は、明治期における近代教育の台頭とともに広く共有されはじめ、戦後の教育改革において明確化され、今日においても維持されている。

この学校教育の平等主義に対する信頼は、性別という個別の事象を対象にした場合にも引き継がれているように思われる。たとえば内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」の平成24年の結果では、「家庭生活」(47%)や「職場」(28.5%)に比して、「学校教育の場は男女平等」と考えられている割合が67.0%と圧倒的に高い¹。すなわち学校という場所は、家庭生活や職場という場所と較べて、男女という性差によって被る不平等の振りが小さいと見なされているのである。この傾向は、同調査が開始された1992年から一貫して続いている。

しかしながら学校に対するこうした社会的な信頼とは裏腹に、教育がおこなわれている具体的現場を微視的に観察することによって見えてくるのは、まさに性別による役割分業や性差が格差となって機能している「隠れたカリキュラム」の存在である（この「隠れたカリキュラム」については第二節にて詳述する）。平等への期待と「隠れたカリキュラム」の存在——この背反した二つの項を含み持つ学校という場所は、「男女の差異を捨象する/同質性を強調する平等主義と、男女の差異と非対照的な関係を強調するセクシズム（性差別）とい

1 「男女共同参画社会に関する世論調査」平成24年10月調査より。出典は <http://survey.gov-online.go.jp/h24/h24-danjo/index.html>（2015年10月26日確認）。

う、矛盾する二つの原則が共存²]している場ということができらう。

ところで表題に付した「ジェンダー (gender)」とは、上述のような性差が単なる「差異」を超え、異なる階層に私たちを振り分ける「差別」として機能していることを明示した性別の社会的・文化的側面に光を当てる概念である。この言葉が私たちに促しているのは、性別がどのようにして認識され、文化として構築されているのか、また性別は社会システムのなかでどのように機能しているのかを反省的に思考することである。

本稿の目的は、一見「平等」と見なされている学校という場所にあつて日々遂行されている教育行為の総体を、ジェンダーという概念が含意する性差の階層性を念頭に置きつつ再検討することにある。あわせて、そうした階層の再生産を回避することを目的として構想された教育実践の動向について取り上げ、その課題と可能性について提示したい。

2. 「隠れたカリキュラム」とは何か

前節で触れた「隠れたカリキュラム」について、まずここで整理しておきたい。そもそも「カリキュラム」とは何を意味する言葉であるのか、またそれが「隠れて」いるとは、いかなる状態のことを指すのか。

「カリキュラム」とは「教育課程」の原語にあたる言葉であり、16世紀後半からライデン大学（オランダ）やグラスゴー大学（イギリス）などの文書に登場する³。その語源は「人生の競争 (vitae curriculum)」というラテン語であり、学生がそれに沿って進んでいかなければならない課程であるとともに、完了しなければならない課程という意味において使用されはじめた。このように、内的な連続性を意味する「秩序」と構造的な統一性を意味する「規律」を重んじる言葉として誕生した「カリキュラム」は、近代学校の重要な方法原理となっている。

カリキュラムを編成するにあたっては、それが「子どもたちの成長と発達に

2 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1999年、42頁。

3 D. ハミルトン『学校教育の理論に向けて』安川哲夫訳、世織書房、1998年、53-54頁。

必要な文化を組織した、全体的な計画とそれに基づく実践と評価を統合した営み」であることに留意する必要があるとされる⁴。もっとも日本においては、文部科学省が定めた学習指導要領がナショナル・カリキュラムとしての規範性を有しており、さらに実際に法的な拘束力も持っているために、前述のようなカリキュラム研究は必ずしも活発であったとはいえないという事情もある⁵。ジェンダーに配慮したカリキュラムを検討する際にも、実際に背後にあるこうした規範性と規制があることを念頭に置くだけでなく、こうした規制そのものの妥当性を問う視点も今後は必要であるといえるだろう⁶。

ところで学校で子どもたちが学んでいるのは、このように教科書に書かれた知識、教科としてまとめられている知識だけではない。そうした内容が「顕在化したカリキュラム (overt curriculum)」と呼ばれるのに対して、教科書や授業内容として教えられている内容とは異なる「隠れたカリキュラム (hidden curriculum)」の存在が、1970年代より欧米で次第に注目を集めるようになった。実は学校における教師-生徒関係や教師の態度といった意識されない日常実践によって伝達される「隠れたカリキュラム」にこそ、生徒たちを不平等に社会化する価値観や規範が潜んでいる——そのように主張したのはマイケル・アップルである。彼は「隠れたカリキュラム」を通じて社会的価値観や規範が形成される初期段階である幼稚園を観察対象に選び、その空間における意味づ

4 田中耕治編『よくわかる教育課程』ミネルヴァ書房、2009年、3頁。

5 前掲書、2頁。

6 例えばPISAにおいて要請されるようなグローバル社会に対応する能力観は、現在のコンテンツ中心の学習指導要領からは生まれてこないという指摘がある。それに対してPISAで世界一となったフィンランドでは、国が1994年に「学び方を学ぶこと」をはじめとした重要なコンピテンシーを枠組みとして決め、教科書検定の廃止や授業時間数の弾力的運用など国の権限を大幅に地方に委譲している。山内はこのような事例を視野に入れつつ、日本においてもコンテンツを最小限にとどめた学習指導要領の再構成が必要だと述べる。詳しくは以下を参照。山内紀之「学習指導要領の過去・現在・未来」松浦良充編著『現代教育の争点・論点』一藝社、2015年、86-96頁。

けへの適応を求められる子どもたちの姿をつぶさに観察する⁷。教室での時間を組織する教師たちの指示に従順に従うこと、教室内の事物から時間の配分に至るまで「勉強」と「遊び」という2つのカテゴリー分けを徹底し「勉強」をより尊重すること（「勉強のみが義務的である⁸」とアップルは喝破する）、勉強的活動における勤勉・忍耐・従順・参加などが高く評価されること——そうした特性をもつ幼稚園という「共同体」への最初の加入経験を通じて、子どもたちは、将来なるべき労働者（〈仕事＝勉強〉をする人）となる経験を先取りしている⁹。このように普段は意識されない「隠れたカリキュラム」を微視的な観点から明るみに出していくことこそが、平等な教育を実現するために必要な手続きであるとアップルは考えた。

もっともアップル自身は、「隠れたカリキュラム」が作用する対象を特に性差に限定していたわけではない。むしろ彼の関心は、子ども期における社会化が形成していく人間のあり方と、その関わり方全般に向けられていた。しかしこうした研究に触発された英米系の社会学研究が、エスノメソドロロジーなど微視的な研究の遂行にあたって「ジェンダー」を分析の指標に据えた時、そこにはさらに数多くの「隠れたカリキュラム」が見出されることになった。

たとえば教室において、男子が女子よりも圧倒的に教師の注目を集めたり、教師と相互交渉をしたり、発言の機会が与えられたりすることを明らかにした研究がある¹⁰。また教師が、生徒の性別によって異なった期待をかけていることを明らかにした研究がある¹¹。また、女子が身体の動きや声を規制されるの

7 M. アップル『学校幻想とカリキュラム』門倉正美ほか訳、日本エディタースクール出版部、1986年、97頁。

8 前掲書、105頁。

9 前掲書、109頁。

10 M. サドカー・D. サドカー『「女の子」は学校でつくられる』河合あさ子訳、時事通信社、1994年。

11 Katherine Clarricoates, 'Dinosaurs in the Classroom: A Reexamination of Some Aspects of the "Hidden" Curriculum in Primary Schools,' *Women's Studies International Quarterly*, 1(4), 1978.

に対して、男子はリラックスした活発な行動を許される傾向にあるという「ジェンダー化された身体」の生成過程を描いた研究がある¹²。これら海外の研究が示していることは、ジェンダーをめぐる「隠れたカリキュラム」がその機能によって、学習機会や将来の進路決定に影響を及ぼすのみならず、ジェンダー性を帯びた身体を生産していくという社会化プロセスの実態である。

ひるがえって日本においても、上記の研究に触発されながら、ジェンダーがもたらす不平等の仕組みを明らかにしようとする研究が蓄積されている。たとえば小学校の現場をエスノグラフィーの手法で読み解いた研究がある。その結果、日本の教育の慣習として、あるいは教室統制の手段として多用される性別カテゴリーが、ジェンダーの社会化を達成しているにも関わらず、当該教室のキーパーソンである教師自身に意識される場合は少ないことが明らかとなっている¹³。あるいは、一つの中学校のかくれたカリキュラムを多方面から吟味することを通じて、男女平等と性差別という一見矛盾したメッセージが錯綜していることを明らかにした研究がある¹⁴。また、それまで日本の学校現場で慣習的に取り入れられてきた男女別名簿が、その使用過程において特定の規範（男/女に異なる意味を付与した上で男を優先する）を繰り返し刷り込むことを明らかにしたものもある¹⁵。

欧米から始まった「隠れたカリキュラム」の研究は、このように日本という特定の学校文化や歴史的な文脈に位置付けられることにより、学校現場にとってよりアクチュアルな知見を提示した。ただしこの「隠れたカリキュラム」の作

12 Martin, A. Karin, 'Becoming a Gendered Body: Practice of Preschools,' *American Sociological Review*, 63(4), 1998.

13 宮崎あゆみ「学校における『性役割の社会化』再考——教師による性別カテゴリー使用をてがかりとして」『教育社会学研究』第48集、東洋館出版社、1991年、105-123頁。

14 氏家陽子「中学校における男女平等と性差別の錯綜——二つの『隠れたカリキュラム』のレベルから」『教育社会学研究』第58集、東洋館出版社、1996年、29-45頁。

15 男女平等教育をすすめる会編『どうしていつも男が先なの？——男女混合名簿の試み』新評論、1997年。

用はむろん一枚岩的なものではなく、さまざまなカテゴリーや文化的領域を横断しながら、ジェンダーをめぐる階層構造を再構築していくものである。その複雑な仕組みの解明は、今後も引き続き重要な課題であるといえるだろう。

3. 「ジェンダーに配慮したカリキュラム」の実践例

前節において、学校文化の「隠れたカリキュラム」がもたらすジェンダーの階層構造の複雑な抑圧構造が明らかとなった。これに対し実際の教育現場では、この構造の再生産を回避するためのさまざまな「ジェンダーに配慮したカリキュラム」の取り組みがなされている。具体的にどのような実践が編み上げられ、展開されているのだろうか。以下で概観していきたい。

まず、これまで日本の慣行であった（ただし世界的には稀である）男女別名簿を、五十音順の名簿に変える混合名簿の動きが1980年代後半より始まっている。この取り組みは、たとえば国立市の小学校における混合名簿の割合が1990年4月時点で学級数の58%を占めるといった数値的な成果にとどまらず¹⁶、学校現場にさまざまな気づきをもたらすこととなった¹⁷。たとえば、男女混合名簿の取り組みと同時に朝会や集会での混合整列が開始され、やがて学校生活のあらゆる場で生起する取り扱いの男女差（名簿をもとにしたロッカーや靴箱の配置、男女の色分けの区別や「さん」「くん」の呼び分け）の廃止にまで至った事例が報告されている¹⁸。あるいは身体測定で男女混合名簿を使用することをきっかけに、体重などの個人データを（これまでの読み上げ方式から）プライバシーに配慮した取り扱いに変更したことや更衣室などの環境整備につな

16 川合真由美「『男が先』を否定することでみえてくるもの——学校の中の性差別と男女混合名簿」天野正子ほか編『ジェンダーと教育』岩波書店、2009年、33頁。

17 「名簿を男女に分けない」実践の意義は、このことを通じ、従来の学校の慣行と教師の意識に埋め込まれた性別カテゴリー分けを顕在化し、確認するところにある。詳細は以下を参照。館かおる「ジェンダー・フリーな教育のカリキュラム」亀田温子・館かおる編著『学校をジェンダー・フリーに』明石書店、2000年、335-352頁。

18 川合真由美「ある学校の現場から——国立市小学校の実践」亀田温子・館かおる編著『学校をジェンダー・フリーに』明石書店、2000年、41-58頁。

がったこと、また男女別だった体操服をハーフパンツに統一した事例などが報告されている¹⁹。

学校教育の中において、意識的であれ無意識的であれ、ジェンダーをめぐる階層差の再生産の実質的な担い手として、あるいは逆にそれを変革するキーパーソンとしても、教師の役割は重要である²⁰。そのような立場にある教師が読むことを念頭に「ジェンダーに配慮した教育」の補助教材や教師用手引書などを作成する動きが、各自治体を中心として始まっている。もっとも一番早い時期である1980年代に台頭してきた「男女平等教育」の手引書は、平等を謳いつつ実際には「男女が本来持っている特性」を「尊重」するとしていたいわゆる男女特性論を前提とするものが多かったといわれている²¹。それに対して1990年代に入り、次第にジェンダーが含み持つ批評的な視点を導入した資料が登場し始める。たとえば国立市教育委員会による『国立市男女平等教育指導手引き』（1992年）や東京女性財団の『ジェンダー・フリー』（1995年）、横浜市の『どうしてわかるの？』（1992年）といった例がある。また教科にとらわれないジェンダー・フリーな学習をすすめるための教材紹介として、大阪府同和教育研究協議会の『じえんだあ・ふりい BOX』（1997年）が刊行され、それぞれの知識をジェンダーの視点から見直すことを推奨している。

また、男/女それぞれに性役割を振り分ける規範として機能する「(近代) 家族」の問題を授業で取り上げる試みにも注目しておきたい。戦後の家庭科教育の足跡に見られるとおり、男女特性論と性別役割分業論に基づいた主婦養成のための科目から男女共修の科目への転換（1989年）の背景には、男女関係なく

19 日野玲子「『ジェンダー・フリー』教育を再考する——担い手の立場から、ジェンダーに敏感な教育を考える」木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』白澤社、2005年、96頁。

20 笹谷春美「ジェンダーの視点を導入したスウェーデン教師教育」亀田温子・館かおる編著『学校をジェンダー・フリーに』明石書店、2000年、287-305頁。

21 亀田温子「教師のジェンダー・フリー学習——ジェンダー・フリーな学校づくりに向けて」亀田温子・館かおる編著『学校をジェンダー・フリーに』明石書店、2000年、314-315頁。

家庭生活に関わるための技量を身につけるとともに、そうした家族を包摂する社会のあり方そのものを考えることへの要請があった²²。多様化する家族のリアルな現実を見つめ、ともにその現実を引き受け、新たな家族と社会とのあり方を想像していく。そうした取り組みが始まっている。

たとえば、小学生と較べてより客観的に社会と家族との関係を捉えることのできる中学生を対象に、マンガやドラマの家族を分析して家族の形や機能について話し合い、近代化とともに進む公/私の二項区分のなかで、「私的領域」として聖域化されてきた「家庭」を相対化して再考しようとする実践が報告されている²³。あるいは高等学校において、家族の歴史や家族に関する人々の多様な意識から、近代家族を相対化したり、地域の労働問題との関係で家族の現実と課題を明らかにする実践が行われている。象徴的に近代家族を描いた『クレイマー・クレイマー』などの映画を取り上げ、「離婚家庭のかわいそうな子ども」という固定的な見方を離れて子どもの権利を検討する、あるいは「妻/母」の語りを読み解き、公私の二項区分や性別役割の是非について検討を加えるなどといった授業が試みられている²⁴。

これらの授業実践が目指しているのは、男/女のジェンダー・カテゴリーを含みこむ「家族」のステレオタイプな見方をずらし、多様な人間関係と多様な家族の可能性を考える道を開くことである。こうした実践を可能にするためにも、沈黙や拒否、あるいは多様な意見が許容される教室空間が保証されること、そこで安心して関われる他者とともに、社会と共生、そして自分自身を問う学

22 鶴田敦子「家庭科教科書バッシングを検証する——攻撃の意図は何か」木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』白澤社、2005年、148頁。

23 山田綾・天野稔子「現代生活を探求する授業——『子ども虐待』・『早期教育』から現代家族を考える」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第2号、1999年、97-105頁。

24 子安潤・山田綾「社会の授業を変える」井ノ口貴史ほか編『授業づくりで変える高校の教室1社会』明石書店、2005年、173-193頁。

びこそが今後より一層必要となるだろうという指摘がある²⁵。

4. おわりに

本稿では、性別における「平等」主義を期待されている学校という場の日々の営みを、ジェンダーという批評的な概念を差し込むことにより再検討することを試みた。その結果、学校の現場には教師-生徒関係や教師自身の態度といった微視的な日常実践によって伝達される「隠れたカリキュラム」が、ジェンダーという指標においても機能していることが明らかとなった。注目を集めることで与えられる発言の機会、あるいは身体の動きや教室運営において、さらには男女別名簿をめぐっても、性別カテゴリーは多用される。そのつど繰り返し参照される男/女のカテゴリー区分は、単なる差異を越え、それぞれのジェンダーを印づけられた主体に振り分けられる学習機会や将来の進路決定の機会に深く影響し、やがては物質的にジェンダー化された身体をもつ存在を生産していくことが明らかとなった。

学校文化の「隠れたカリキュラム」において機能するジェンダーは、単なる差異ではなく差別として機能する。その複雑な抑圧構造が明らかとなりつつあるいま、実際の教育現場で実践されている「ジェンダーに配慮したカリキュラム」においてもさまざまな取り組みが行われている。まず、学校現場においてはこれまで慣行であった男女別名簿を廃止し、男女混合名簿にする動きがあるほか、「ジェンダーに配慮した教育」の補助教材や手引書の刊行が相次いでいる。また家庭科をはじめとする教科においては、規範的な「(近代) 家族像」を問い直し、多様な家族像とそれを許容する社会のあり方を探っていくような授業実践の試みもある。

一連の実践が今改めて問うているのは、ジェンダーという批評性をもった観点から公教育をどう構想しなおせるのかという課題である。学習内容を社会関

25 山田綾「ジェンダー・バックラッシュと家族の言説」浅井春夫ほか編著『ジェンダー/セクシュアリティの教育を創る——バッシングを超える知の経験』明石書店、2006年、251頁。

係の中に位置づけること、教育実践の中に内包される権力関係にセンシティブであること、そうした学習者自身の自己変容を促していくような方法論をどう編み出してゆくのか。おそらくこれらの問いに応答する実践とは、いつか「確立」されるものではなく、むしろ絶え間ない問い返しとともに模索が継続されていく未完のプロジェクトとなるはずである。

あわせてジェンダーに配慮したカリキュラムが今後視野に入れておくべきなのは、公教育を取り巻く社会全体の大きな流れであることも指摘しておきたい。20世紀以降の情報、人、マネーの流通や移動の拡大化・流動化およびテクノロジーの進展にともない、近代国家のボーダーのみならず、近代の個人が持つとされた知や身体の自律性が液状化している。その結果「国家」や「家族」、「(個人の) 身体」といった、これまではその意味が自明なものとして流通・機能していたカテゴリー間の境界線が引き直され、あるいはカテゴリー内での再編が進んでいる²⁶。ジェンダーに配慮したカリキュラムがこれまで省みようとしてきた多様な性のモデルや家族のモデルが、ここにおいて「家族の崩壊を奨励している」として執拗に批判される近年の傾向²⁷は、上記の社会情勢に連動したものと考えられる。批評概念としてのジェンダーを手にした私たちは、解体されていく性の二元論とともに新たに進行するアイデンティティの政治的再配置の動き（それは既に「性」をめぐるものですらなくなっている可能性がある）に注意を払いつつ、今後もこうした反動の動きに加担しないようなカリキュラムのあり方を探ってゆかねばならない。その作業はおそらく、実践を通じた教育現場との緊密な往還による反省を経て、より切実性をもった練り上げ

26 「フェミニズムの思想を稼働しつづけるもの」竹村和子『境界を攪乱する——性・生・暴力』岩波書店、2013年、93頁。

27 たとえば八木秀次「お父さん、お母さん、ご存知ですか？ 男女共修『家庭科』ではこんなことが教えられている！」八木秀次編著『教育黒書——学校はわが子に何を教えているか』PHP 研究所、2002年、162-199頁を参照。同様の議論として高橋史朗「『家庭科』という環境ホルモン ファロスを繕めて国立たず——桃から生まれたももこちゃんは鬼と共生？ いい加減にしろ、フェミニズムの腑抜けども」『諸君』2002年6月号、156-166頁などを参照。

をも要請されるはずである。

※本論は、JSPS 科研費23730758の成果の一部である。